

イスラームを通じて苦境を切り抜けてきたアチェ

近世のアチェの経験から

西尾寛治

昨年末に発生したスマトラ沖地震は、はからずも東南アジアの西域が環インド洋地域の一員であることを我々に再認識させてくれた。

スマトラ北部は、インド洋方面からの来航者が最初に遭遇する東南アジアであり、環インド洋地域と長い交流の歴史をもっている。竜腦などの森林生産物の産地として知られたこの地は、古くからタミル商人を引き付けていた。近世前夜、東南アジアで最も早くイスラームを受容したのも、この地域の港市国家群であった。ほぼ同じ頃、スマトラにはインド原産種のコショウが導入され、内陸部で盛んに栽培されるようになっていた。そして近世になると、この地域の港市国家群は、交易とイスラームのセンターとして栄えた。すなわち、後のムラコ語歴史叙述作品が記す繁栄——「ダガン(商人)とサントリ(ここでは「イスラーム修行者」の意)が多数集まった」——を文字通り達成していたのである。16世紀スマトラ北端に興隆したアチェは、そうした港市国家の典型であった。

ここで近世におけるアチェの発展過程を振り返ってみよう。16世紀初期のマラッカ海峡では、ムラカ(マラッカ)を占領したポルトガルが、香料交易独占とキリスト教布教の野望を抱き、利害の対立したムスリム商人に対する敵視政策を実施していた。そのため、彼らはムラカに代わる寄港地を必要としていた。こうした情勢に最も機敏に対応したのが、新興港市国家アチェであった。アチェからスマトラ西岸沿いに南下してスンダ海峡に至れば、ポルトガルの待ち構えるマラッカ海峡

を経ずとも、東南アジア各地へ自由にアクセスすることができた。そうした立地条件に恵まれていたアチェは、1520年代前半に南方へ勢力を拡大し、コショウ生産地をその支配下におく一方、競合関係にあったペディエ、パサイなどの港市国家を従属させた。こうして交易発展の基礎を固めたアチェは、ポルトガルとの対決姿勢を強め、1524年の海戦で同国の艦隊を撃破した。さらに1530年代には、西アジアのオスマン帝国との関係強化を試み、東南アジアのイスラーム勢力の盟主たらんとした。アチェはオスマン帝国へコショウを輸出し、その見返りに兵士や武器を供与された。そして、その軍事的支援を背景に、ポルトガル領マラッカと対決し、またスマトラ内陸部へ勢力を伸ばした。その際、イスラームのジハードの観念も大いに活用された。アチェのスマトラ両岸支配を阻止しようとしたジョホールには断固とした態度で臨み、1564年に王都へ進攻している。このような外交及び軍事上の成功により、アチェの威信は高まり、東南アジアのイスラーム勢力の盟主として自他ともに認める存在となった。こうして16世紀後半には、多数の商人やウラマーが来航するようになり、アチェは東南アジア有数の交易とイスラームの中心地として栄えた。17世紀には、コショウなどの香料を求めて東南アジアへ進出したヨーロッパ諸国の商人もアチェの港市に殺到した。

だが、そうした繁栄の裏面で、アチェでは権力闘争が激化していた。王権は弱体化し、1570～

80年代には、オラン・カヤにより5人の王が廃位された。そのうち4名は弑逆されたという。このようなオラン・カヤからの脅威に直面したアチェの支配者たちは、16世紀末から反撃に転じる。特にスルタン・アラウッディン・リアヤット・シャー・アル・ムカミル(在位 1589-1604年)やスルタン・イスカダール・ムダ(在位 1607-36年)が実施した一連の諸政策は功を奏し、国王への集権化が進行した。

その中で注目されるのは、イスラームが王の支配の正当化に活用されている点であろう。例えば、イスラームの祝祭を宮廷主催の公式行事としたこと、イスラーム法廷の設置、アチェ臣下に対するイスラーム法の罰則の厳格な適用(特に飲酒、酒類の製造・販売や窃盗に対する)などである。これらの諸政策は、王の統治がイスラームに則した正当な支配であることを鮮明にする効果があり、その意味で王権の強化に貢献したといえよう。そうした支配の正当化は、アラブ人や西アジアで修業を積んだ在地のウラマーを登用することを通して行われた。それにより、支配者は彼らのイスラームに関する深い学識を独占した。他方、登用されたウラマーは、その学識を駆使して奉仕し、支配者の要求に応えた。こうした両者の関係は、スーフイズムの「完全人間」論¹導入に端的に表されている。上記の支配者たちは、神人合一を説くこの論に魅せられ、それに精通したウラマーの指導下で修行に励んだといわれる。すなわち、幼少時、臣下からの脅威に晒された彼らは、神に等しき絶対者として臣下の上に君臨することを

欲したのである。

17世紀頃のアチェにおけるイスラーム的規範の浸透には、以上のような支配者側の思惑も影響していた。ところが、興味深いことに、17世紀中頃になると、イスラームは逆に王権の相対化に作用するようになる。これにはいくつかの要因が挙げられる。まず、17世紀前半のアチェで活発化したキターブ・ジャウィ(イスラーム関係文献のムラユ語翻訳書)の作成によって、イスラーム関係の正確な知識が従来にも増して広く普及したことである。その頃登用されたインドのグジャラート出身のアラブ人ヌルッディン・アル・ラニリは、キターブ・ジャウィの作成に精力を注ぎ、僅か7年間のアチェ滞在中に30近くのキターブ・ジャウィを執筆した。クダーの歴史叙述作品『ヒカヤット・ムロン・マハーワンサ』によれば、クダーのムスリムは、アチェから送付されたアル・ラニリの書を通してイスラームの教義内容を正確に理解するようになったという。なお、17世紀後半には、アル・ラニリの後任として登用され、アチェの宗教行政を統括したアブドル・ラウフによってコーランのムラユ(マレー)語注釈書が執筆されている。西アジアで長年イスラーム諸学を修めた彼によって記された注釈書は、その後20世紀に至るまでムラユ人ムスリムに愛用されたという。さらに特筆すべきは、イスラームの王国統治論の訳書『タジュ・ウス・サラティン』によって、アディル(公正)な統治²の実現こそが支配者の本務であることが強調されたことであろう。この書は、その後ムラユ人はもとよりジャワ人支配者の間でも統治の指南書と

¹ 「完全人間」論は、広くムラユ世界の王権の観念へ影響を及ぼした。その影響は、『スジャラ・ムラユ(ムラユ王統記)』の叙述にも投影されているという。

² 具体的には、上位者の不正に苦しむ臣下の救済、またそのような不正がないよう、臣下をよく監督することをさす。

された。

また、上記のアル・ラニリやアブドル・ラウフが、スーフイズムの信奉者もイスラーム法を遵守すべきことを力説したことも、その要因のひとつといえよう。すなわちそれは、アチェの支配者を魅了した「完全人間」論の否定を意味していた。なお、このような王権の相対化は、ムラユ系港市国家でも、17世紀から18世紀にかけて進展することになる。

以上のように、近世の港市国家アチェの発展を概観してみると、アチェ社会に対してイスラームが実に多様な役割を果たしていたことがわかる。イスラームの発展に、ポルトガルとの対抗意識、ムスリム商人誘致、支配地域の拡大、さらに王権強化という支配者の思惑が影響していたことは確かである。とはいえ、西アジアとの直接交流、アラブ人ウラマーの招聘、キターブ・ジャウィの作成

など、イスラームの隆盛を促す活動が多方面から展開されていたことも事実である。そのような点に注目した歴史家 L・Y・アンダヤは、近年、「アチェはイスラーム性をより強調することにより、ムラカとは異なる新たなモデルをムラユ世界に提供した」という主張を展開している。

アチェといえば、まず注目されるのは、近代のアチェ戦争におけるオランダへの徹底抗戦や近年の分離独立問題であろう。だが、その歴史をもう少し前の時代まで遡った上で眺め直してみると、アチェの人々が、その主体は異なるとはいえ、イスラームを介してそれぞれの時代に直面した問題の克服をはかり、社会を発展させてきたことがわかる。そうした経験を継承しているアチェの人々は、必ずや現在の苦難に耐え、新たな未来を自らの手で逞しく切り開いていくに違いない。